

カウンセリング施設「心の相談室」

プレイ・ルーム壁画の制作

黒田 克正

(教育学科教授)

1. 京都女子大学 心の相談室 (KYOTO WOMEN'S UNIVERSITY GRADUATE SCHOOL COUNSELING CENTER)

プレイ・ルームへの改修

平成16年6月、京都女子大学こころの相談室で、土蔵をカウンセリングのためのプレイ・ルームに転用するための改修工事が行われ、内部の環境整備に壁画制作者の立場で参加した。京都女子大学「心の相談室」は、倉庫兼研修棟として使用されていたものを平成12年に大幅改修し、臨床心理療法のカウンセリング施設として転用された。さらに平成16年、そのうち倉庫として使われていた旧土蔵をプレイ・ルームとして追加転用するための改修がなされ、そこへ壁画制作者として参画した。その制作から完成までの過程をここに記録する。

改修工事の内容は、屋根・床・入り口扉・窓・階段手すり等の修理、照明器具等の改善、塗装による内装美化工事、物置き棚の一部撤去及び転用のための修理、明かり取り窓・エアコンディショナー・水道・換気扇の設置等である。それに加えて内部壁面全体に壁画を制作し、絵画からの積極的なカウンセリングの環境創りを試みたのである。

この建築物は武田五一⁽¹⁾の設計した住宅建築であるが、京都女子大学が所有する以前にかなり粗悪な改修工事が幾度かなされておられ、特に一階部分の内装にプリント合板等の材料の使用が目立っている。そして、京都女子大学の所有になってから施設として使われるまでは、倉庫に使うなど長期にわたって実質的に放置されていた。しかしながら、そのような改修を経ているが、依然として昭和初期の上質な住宅建築の

品格を保持している。和室中心の各部屋はそれぞれ庭に面しており、格調高い意匠とぜいたくな間取りが、和風建築独特の落ち着いた雰囲気醸し出している。臨床心理の実践施設としての新たな役割を担っている生きた建築物であると同時に、歴史的住宅建築としても貴重なものである。⁽²⁾

筆者は、この建築物が「こころの相談室」として再生される初期の段階から、内部に美術作品を展示するなど、ささやかに参画してきた。和風の空間と筆者制作の現代絵画という不思議な取り合わせがこの良質な建築空間においては違和感無く調和していて、展示スペースとしても興味をそそられた。山上教授を中心とする関係者のこの施設に対する考えは、贅沢な和風建築の趣をそのままにカウンセリング活動に活用するというものであり、当初の考え通り、その後も守られ維持されてきている。そのような建築の中で筆者は、唯一使用されないままにあった古い「土蔵」空間に興味深く見てきた。その蔵は後の使用者によって増築されたようで、建物のもっとも奥まったところに位置し、廊下によって繋がれている。開設当時、いずれは施設の一部として使いたいという所長山上教授の計画を耳にして、その改築に際しては、自作の壁画によって新たな実験的空間を創造してみたいという願望を抱いた。鉄の重い扉をあけて、初めて土蔵内部に足を踏み入れた時、厚い土壁独特のひやっとする空気の冷たさに触れ、子どもの頃、薄暗い物置き等の中でかくれんぼに興じた思い出や、野山で自分だけの秘密の隠れ家を見つけた時の、なんとも言えずわくわくした記

憶を思い浮かべた。「こころの相談室」を訪れる子どもたちが、この土蔵の中でイメージをいっぱい膨らませ、自らの意志で想像から創造にむかってゆく場、あるいは作ったり活動したりしたくなるような空間、そんな場を創り出せないか、それは筆者の画家としての習性に似た欲求であり、同時に、子どもの頃、田舎の農村で育った筆者のノスタルジーに近い気持ちであったと思う。現代社会において、都会で育つ子どもたちが失ったもの、子どもの隠れ家的あそびの空間を創り出すことと、臨床施設としての用途とは合致するものだと考えたのである。

この制作はプレイセラピーの活動の観点から捉えれば、絵画表現の直接的な介入を意味する。消極的な装飾としての壁画美術では決してありえないものである。そこにこの制作の特別な意味があると考えられた。この様な願望を密かに抱きながら約4年が過ぎたが、今回の改修工事でその機会を得て、はからずも絵画制作者としての表現の欲求を実現させることとなった。

内壁の塗装や新たな窓の設置によって、蔵の内部は全体的に明るく健康的な雰囲気に変貌した。当初の薄暗く密やかな雰囲気は少々変化した。それはこの施設の役割から考えれば当然のことである。しかし、現状の古く重々しい鉄窓や鉄扉、古い木材の柱、押し入れ棚等、歴史を刻んできた美しい痕跡は、希望によって出来る限り現状のまま残された。土蔵の壁に包みこまれるような密やかな空間の特徴も基本的に変わってはいない。不思議な空間を演出するために、照明の調節も可能となった。施設の意味合いは考慮しながらも、それにも増して、このような隠れ家的空間創造への意欲を胸に秘めて制作を開始したのである。(写真1)

今回、プレイルーム拡張工事にあたって、所長の山上雅子教授との打ち合わせの機会を数回持ったが、さらにカウンセリングにおけるプレイルームの持つ意味について筆者に理解を持たせる為に、以下のような書簡を頂戴している。



(写真1) プレイルームへの改修工事

プレイ・ルームについて (山上雅子教授よりの書簡)

〈プレイ・セラピー〉

プレイ・セラピーとは、遊びをコミュニケーションの媒体とした子どもの心理療法です。子どもは、自らの内的な体験や感情を言葉で表現することが難しいため、遊びを通してそれらを表現します。子どもは治療者との関係に支えられて、覆い隠されていた不安、悲しみ、怒り、欲求などを表現します。そして、遊びの中で不安を鎮め、悲しみを癒し、怒りを発散し、欲求を充足するなどして、精神的なエネルギーを得ていきます。また、治療者が子どもの表現を理解し、共感することで、子どもは一人の人間として尊重されていると感じることができます。そのため、プレイ・ルームでは子どもが自由に、安全にさまざまな感情を表現できるような設備が必要です。

〈プレイ・ルーム〉

プレイセラピーのための専用の部屋が、プレイ・ルームと呼ばれています。プレイ・ルームは、ある程度の広さと安全性を備えており、頑丈であることが大切です。静かで落ち着ける場であり、そこで援助者とともに過ごすなかで温かくつつまれながら、自己表現が励まされるような雰囲気が理想的です。また、水を使って表現する子どもがいるので、水への耐久性があるほうが望ましいと思われます。刺激が多すぎると気が散ってしまい落ち着かなくなる子どもがいるので、子どもの内的な世界に対して侵襲的となるような、刺激性が強過ぎるもの(窓越し

に見える風景や聞こえてくる音、室内の器具の色彩)が過剰に配置されることは好ましくないと考えられます。また、子どもの感情表現を助けるような遊具(人形・ぬいぐるみ、ままごと道具、乗り物、武器、筆記用具、粘土、ゲームなど)が、取り出しやすいように棚に整理されていることが必要です。ただし面接の場では、表現したくないという気持も表現の欲求と同じくらい大切にしますので、ある方向への表現を強要しないように注意を払います。子ども自身が自ら発見したり、切り開いたり、籠ったりしながら、心理的な成長を体験できる場がプレイ・ルームです。

〈蔵のプレイ・ルーム改装に寄せる想い〉

今回改装が予定されている蔵プレイ・ルームは、小学校高学年から中学生位の年齢の子どもが対象となります。この年齢で心理的な援助が必要な子どもは、言語的カウンセリングにはまだ少し早いのですが、幼児的な人形などによる遊びではではものたりなく感じる傾向があります。思春期の入り口にさしかかっている、常識や固定観念にとらわれたい、内面的な深い表現の場を必要とする年齢でもあります。このため今回の改装では、この年齢の子どもたちに、言語と身体活動の中間領域にある、表現や活動の経験を十分に保証できるような場を提供したいと考えています。このため、子ども自身が使い方を発見していけるような、可塑性が高く、シンプルで、蔵自体が備えている、ちょっと不思議でおもしろく、こころをしっかりと包み込みながら、冒険を励ますような雰囲気大切に、卓球などの身体活動から、描画、制作、箱庭表現なども可能な空間をめざしています。このため、蔵の持つ可能性がよりはっきりと浮かび上がってくるように、室内の棚などの保管庫と遊具は、必要最小限のシンプルなものにしたいと考えています。』(05年7月21日)

以上のようにカウンセリング施設としての環境の一翼を担うこの壁画は、不特定多数の鑑賞者の眼に触れるという、いわば壁画の持っている宿命だけでなく、その結果の影響を強く念頭

に置きながら制作する点で、通常の絵画制作と大きく異なっている。画廊や美術館での展示を前提とする絵画制作は、常に制作者からの一方的な投げかけとして表現され、制作者の内的欲求に沿ってひたすら純化・先鋭化される。特に現代の絵画表現はこの点で独善的であり、鑑賞者の受け取り方をほとんど考慮しない。筆者自身も日頃からそのような意識で制作している。また現代の絵画の制作は、ほとんど作者固有の方法論とその経験の積み重ねで成り立っている。筆者自身の経験では、かつてイタリアの前衛的な高級家具ショールームにおいて壁画を制作した経験がある。³⁾それは斬新なデザインを売り物にしている東京・六本木のインテリア・ショールームという特殊な空間であり、家具やインテリアをすべて筆者の壁画にあわせて企画配置するという特に先鋭的なデザイン空間であったため、自身の表現を過激に先攻させることができた。また環境そのものが過激な表現を第一の価値とする場であったことも、制作者をその方向に掻立てた。イタリア・ミラノを中心とする先端的なインテリアデザインを愛好し、望んで訪れる顧客に向けて、粗野で表現主義的な筆者の制作を爆発させた。今回の制作とはかなり異なった制作であった。

今回の制作においては、まず不特定多数の鑑賞者を前提として、半永久的に設置されることを念頭に置かねばならない。この空間に包み込まれるさまざまなクライアントが、精神的に安定した環境を確保する場でなければならない。ゆったりとこころの扉を開いて、絵が投げかけるイメージとさまざまに交感しながら、心の安定と活動の熱意を取り戻して行く空間でなければならないのである。

制作者にとっては、内的欲求に沿って生み出して行くイメージと、それを受け取る子ども達のこころとのいわば交感の接点を見つけ出す作業をしなければならないのだが、これ自身、今まであまり意識したことの無い不慣れな作業である。そのことがイメージの立ち上げにも影響を及ぼし、構想の段階から大きく立ちはだかった。具体的な形象を想起することが出来ず、つ

いに下絵での計画作業を放棄して現場に臨むことにした。つまり現場での発想を拠点として、即興的に制作を進行させることにしたのである。以下にその制作経過を記す。

2. 壁画の構想過程

(内装の改修工事、下地作りから

単色(黒)による素描へ)

- 1) 2004年6月某日 所長 山上雅子教授、施設課長中村氏との打ち合わせ(改修項目)
 - * 修理改装工事期間 8月1日~31日
 - * 修理内容
 - ・屋根雨漏り改修のためのカバーリング工事
 - ・内壁・天井および窓枠の塗装
 - ・鉄製扉・窓枠は修理し現状を保持する・床材/1階は暗めの木材様プリントシートを張る。二階現状フローリング木材のままとし、壁画完成後ワックス仕上げとする。
 - ・白壁(現状プラスター塗り仕上げ)アクリル系水性塗料による塗装。
 - ・換気扇, 窓, 棚の設置 戸棚の撤去

古い土蔵の雰囲気可能な限り残し、包みこまれるような空間の特徴と歴史的味わいを残す。その為、鉄製扉、鉄製格子付き窓枠は可能な限り現状のまま修理して使用する。壁・天井はすべて白色プラスター仕上げとし、壁面を際立たせる環境を創る。照明はあまり存在感の無いものを選択、スイッチによる調光を可能とする。

2) 全体構想

美術制作者は表現の場に際して、今まで継続させてきた自分なりの方法の中で考える。表現の場の状況によっては展開の糸口や基本構想を模索することがあるが、造形上の表現法や内容を根幹から大きく変化させることは出来ない。それは美術制作者の制作の一貫した方向性を維持するための、自らが作り出した方法である。しかし今回は、壁画とそれに接する鑑賞者への配慮がイメージの立ち上げに大きな重圧となり、虚弱な造形思考を脅かすプレッシャーとなった。筆者自身の方法とこの場の条件との折衷点を模

索することになるのだが、今までの姿勢を条件下で継続させるにはどうすれば良いか、苦悶する時間が続いた。その結果、美術制作者としての筆者自身の世界を畏縮せず表現するためには、唯一、自分自身が落書きする子どものような気持ちになることであり、子どもと同じ視線に立ってイメージし、純粹に表現する欲求を持つことであるとの考えに至った。作為的な意識を捨てて、この純白の壁に立ち向かう子どもの意識に立ち返ること、これが構想段階での結論であった。それ以後、下絵による計画はすべて取り止め、おおまかな抽象的・感覚的なことばによる構想での計画を立てることとした。その前提として以下のような留意点を設定した。

- A. 抽象的図像による表現とする。子どもの内的な世界に強引に侵入したり、イメージの強制をするような具体的図像を出来るだけ使わない。
- B. 色彩計画は調和を優先させる。強い色彩が全体に横溢するような、過度の刺激的対比を生み出す構成を極力少なくする。
- C. イメージ創作については、階ごとに異空間の中に突然包み込まれるような、意外性を強く感じさせる展開をしない。
- D. 極端な鋭角的形態の強調や、強い対比、硬直した線による過度なくり返し・動勢感の強調をしない。

現場でのイメージ創りののち、8月末、時間を置かずに制作を開始した。イメージ創りにあたっては、克明な下絵制作を一切せず、現場での即興的描画を中心に制作することとした。素描の要素を大切に、線の勢い、軽快感をそのまま存続させた。壁画全体のおおまかな構想は、壁面が一面ごとに孤立せず、2階建て土蔵全体が一つの空間として連続性を持つように配慮することとした。子どもの小さなからだと眼での観察に対応して、低位置や個々の部分の観察についても楽しめるよう配慮した。その為、さらに以下のようなことばによる抽象的イメージを構想した。

- ・「自然や日常生活から柔軟にさまざまなイメージを巡らし、それを通じて生命や自然への賛歌を歌いあげる。」
- ・「心の抑揚のままの線描によって、落書きのような楽しさと安心感を持たせる。」
- ・「さまざまな環境とともに、子どもたちそれぞれが共に生きているという実感を持ち、自由に表現出来るよろこびを感じさせる。」
- ・「だれも知らないひそやかな隠れ家の雰囲気絵を楽しみ、いろんな想像のヒントを子ども自身が発見出来る場とする。」

さらに各壁面のイメージを具体化させるキーワードを以下のように設定した。

- ◎「1階」(卓球その他、簡単な運動、遊具であそぶ開放的なプレイ・ルーム)
 - ・正面(扉を開けて最初に出会う画面)
明るく軽快なリズム感、開放感、生命の賛歌
天井まで拡張する図柄の展開 花 人々 動物 サークス 風 軽快な音楽
 - ・左面(天井にむかっての動勢感 安定した構図) 日常 家族 家 旅行
- ◎「階段側面」(1階と2階を繋ぎ、2階へのリズムカルな導入を誘引する画面)
空に舞い上がる誘惑 風の誘い 動物・魚・人・上への動きを誘惑する円
- ◎「2階室」(劇あそび、ひそやかな部屋、他、やや閉鎖的な空間)
舞台背面を核として他の壁面に放射状に拡大する図柄。舞台背面は深度の感じる多重的空間感を持っていること。抽象的形態 演ずる人の場

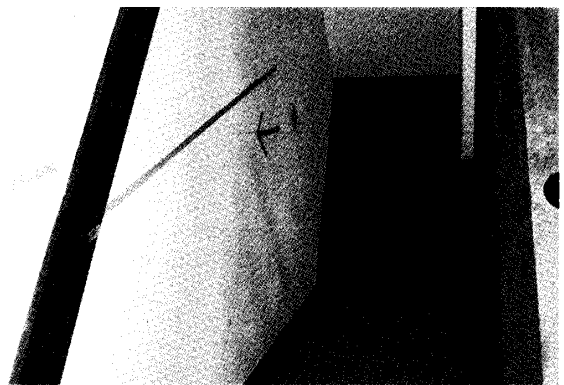
3. 制作の過程

1) 描画の下地作りと素描

建物はコンクリートブロックを下地とする土蔵作りであり、内装はすべて白壁である。壁面積の比率が多く、壁画による包み込むような空間構成が可能である。壁改修工事にあたって吸湿性の白壁の美感を再生するため、水性塗料(アクリル系)による塗装が行われていた。そ

の為、水性(アクリル)絵の具だけでなく、制作素材の応用の可能な下地作りとしてジェッソ(下地剤)による地塗を塗布した。

内部に立つと純白の壁面に包み込まれ、他を寄せつけない潔癖さで迫ってくる。制作者はそれと立ち向かい、抵抗感をなくすところから始めなければならない。そのため、剥がすことが可能な粘着性の弱い紙テープによってあたりをつけ、それを手がかりとして制作を開始した。これは各画面の造形的な骨格や、画面相互の関係をしめす基盤となった。(写真2)(写真3)



(写真2) 紙テープであたりをつける



(写真3) 紙テープであたりをつける

2) アクリル絵の具による色面の塗布からドロイングへ

部分の描写にこだわらないで、室内全体の線の集合が生み出す動勢感や、図の量的バランスを見るように注意する。色面の置き方は、各画面と他との釣り合いや蔵全体の展開を性格づけるものである。テープの直線と筆の有機的タッチを混合させ、全体の展開を計画しながら塗り進めた。乾燥後、鉛筆により部分的なドロイングを無作為で開始する。堅い壁面への太い鉛

筆による線描で、かなり肉体的な負担を負うことになり、描き、テレピン（揮発性油）によってぼかし、そしてまた描くという、かなりの忍耐を要する作業となった。

描きははじめは汚れのない純白な美しさに臆し、濃い描画線を引くことに勇気と決断を要した。なぜなら、いかなる線や色彩も、純白の環境下ではすべて美しい。すべてが鮮明であって、鮮烈な美となって見える。制作者はここで明らかに自己表現の勇気を削がれ、純白の美しさが生み出す圧力と闘わねばならなくなった。そのため、いわば汚れによる自己回復を目論んで、薄い濁色での散発的な色面の塗布を各壁面ごとに配することにした。このことは気持ちを気楽にさせ、構えと純白の圧力を取り去ることに役立った。(写真4)



(写真4) 薄い濁色表現

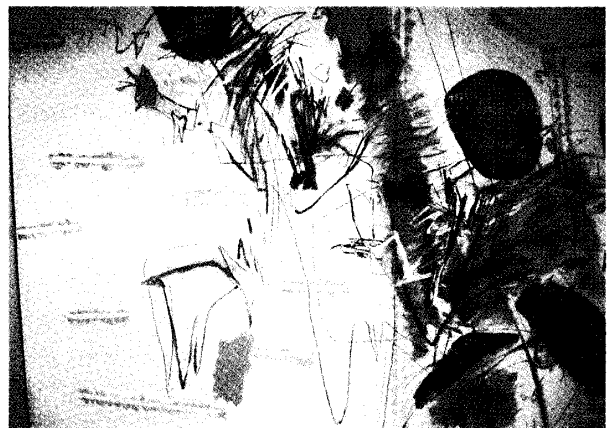
描くとは表現のために白を黒く塗りつぶし、汚す作業でもある。自己の表現は、純白の環境下では汚す作業のなかに自己の投影を模索することである。そのことに気付き、構えなく伸びやかな描画を展開するまでには、さらに数日を要した。

描画材料：芯鉛筆 クレヨン アクリル絵の具

3) 中盤での描画と彩色

下地の白が消え、白の主張が弱まるにしたがって、着彩された色の効果が発揮され始める。しかしながら、白地の強さを前提とする黒線描による落書きのような画面では、白地が消え、色彩の強弱が中心になる過程で壁面の緊張感を徐々に失うことになる。つまり、白の地が全面におおい尽くされている段階においての平面的

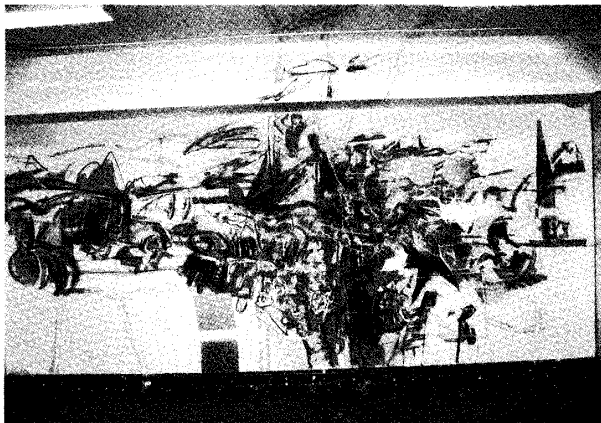
緊張感は、その上に置かれた色彩の濃度が強まるにしたがって色彩相互の力関係に支配され、白地の緊張感を喪失して行く。それと同時に線の独立性は弱まり、生命力を断たれる。しかし、彩色の透明感が保持できる期間、つまり白地が地として見えている段階は制作の前半のみである。なぜなら、色彩は塗れば塗るだけ色が濃く深くなって行くからだ。この時点で制作者は、前進する（線を捨て、色彩対比による世界に移行する）か後退する（白い下地材を塗って、やり直しを繰り返す）かの決断を迫られることになる。筆者は出来るだけ強い色彩対比を避け、落書きのような壁の質感と、かきなぐりの鮮烈さを保持し、この先を鑑賞者の発想に委ねるような未完に近い状態で絵を終わらせることにした。(写真5)



(写真5) 落書きのような、かきなぐりの鮮烈さを残す

4) 余白の確保と完成

蔵内部はすべて純白の壁面である。制作開始からの白との闘いは、ほぼ1か月経過し、蔵全体を図像によって埋め尽くすこととなった。即興的なイメージによって、各パートの図像が室内いっばいに充満し、後半では、図の面積に対する全体の余白の確保に苦慮する。これは絵画制作者としての日頃の習慣から、強い自我に左右され、描画をひたすら拡大させていった結果である。この時点では当初の留意点、この制作の持っている使命を忘れかけていたのかもしれない。余韻としての白地の存在を危うくした結果、蔵全体がかなり騒々しく、圧迫感を感じるころまで進行していた。(写真6)

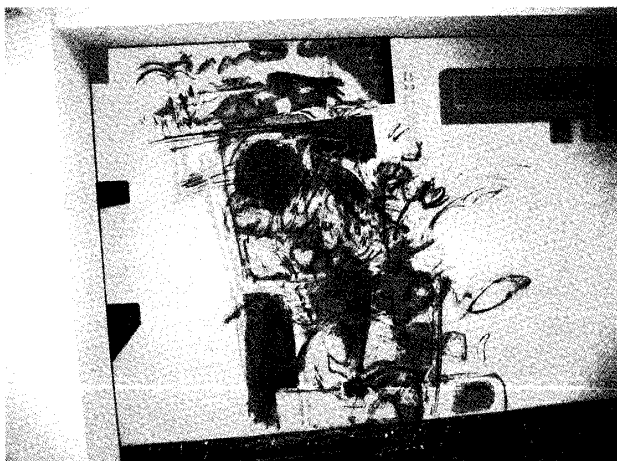


(写真6) 一階正面・途中

山上教授との受け渡し前の打ち合わせによって、この壁画の使命からの逸脱を指摘され、冷静さを取り戻す貴重な時間となった。まことに感謝にたえない。受け渡し数日前に図像を大幅に削減、余白としての白地の面積を増加した。特に一階左画面は、三分の二を消去し、一階全体としての図と余白との関係をかろうじて確保した。(写真6・7 一階左 消去前・消去後)
完成後、アクリル系保護ニス进行全面に塗布した。

4. 制作を終えて

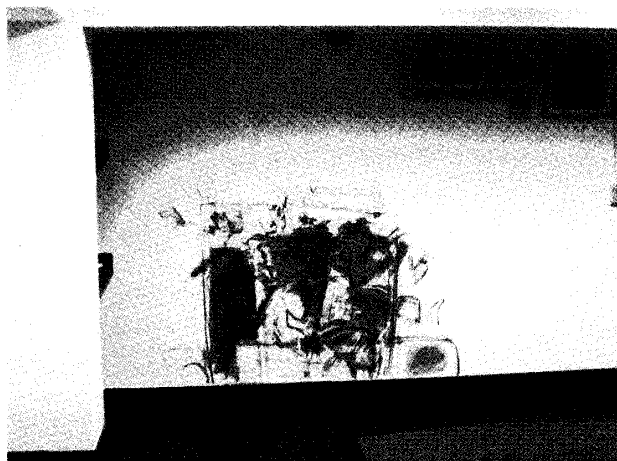
「カウンセリングは表現欲も大切にすし、表現したくない気持ちも大切にす」との山上教授の言葉の中に、クライアントを尊重し、支援する基本的姿勢を見て取れる。臨床心理にほとんど知識を持たない筆者は、この壁画制作においてどのような働きかけをすれば壁画の存在の意味を持たせられるのかを自問自答した。そ



(写真6) 一階左・消去前

してクライアントを支援し、後押しする場としての壁画と、自己表現としての絵画とを、安易に妥協すること無く制作したいと考えた。それは制作者としてのプライドなどではなく、子どものように純粋な気持ちで、心をこめて表現すれば、受け取る子どもたちも必ず理解してくれると考えたからだ。絵の内容はきわめて雑然と、社会生活のさまざまな図景を描き込んでいる。決してきれい事だけではない社会の有り様をそのままに、それでも生きることは素晴らしいと、筆者なりのイメージで様々に描いたつもりである。「世の中いろんな人間が一緒に生きているんだよ。元気を出してわいわいがやがや、みんな一緒に生きようや。」と、約二ヶ月半、土蔵の中の閉塞した空間で、筆者は一階二階を行き来しながらつぶやいた。

先にも述べた通り、絵画制作は、自己の制作の範囲内におけるイメージや、新たな造形手段の発見によって継続しているものである。その範囲が狭義の技術的価値観に陥ると、いわゆるマンネリの状態の作品しか生まれない。しかしながら、経験を重ねるごとに方法論は強固に、そして技術的にも確立されて行く。そこにマンネリ化への落とし穴がある。今回の制作は、従来の制作者と鑑賞者の関係とは異なるところに表現の焦点を据えなければならなかった点で、まったく新たな体験をした。しかしながら、この壁画作品が、今後どのように作用するかは注意深く観察していかなければならない。当然ながら、カウンセリングに悪影響を与えるようで

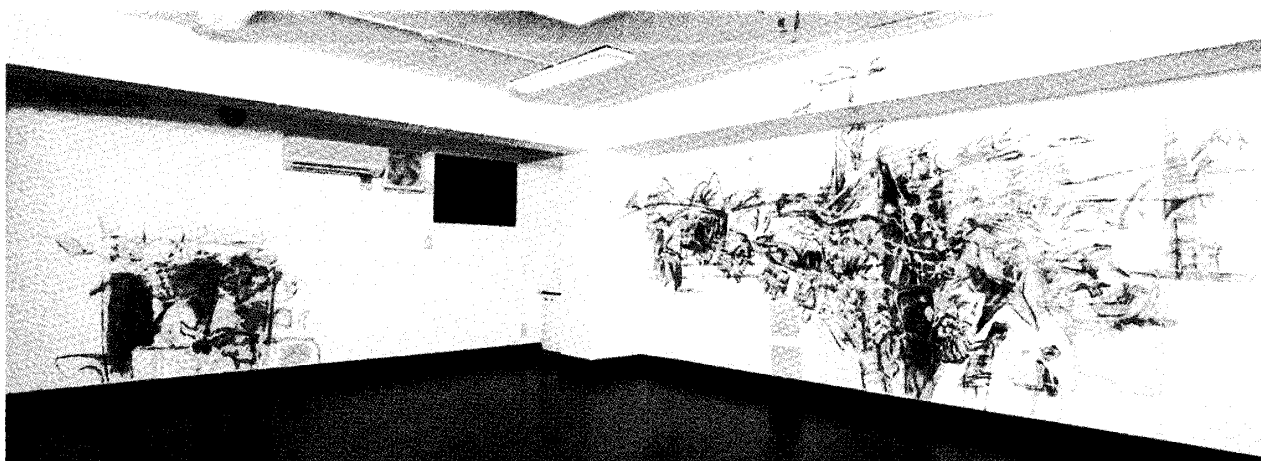


(写真7) 一階左・消去後

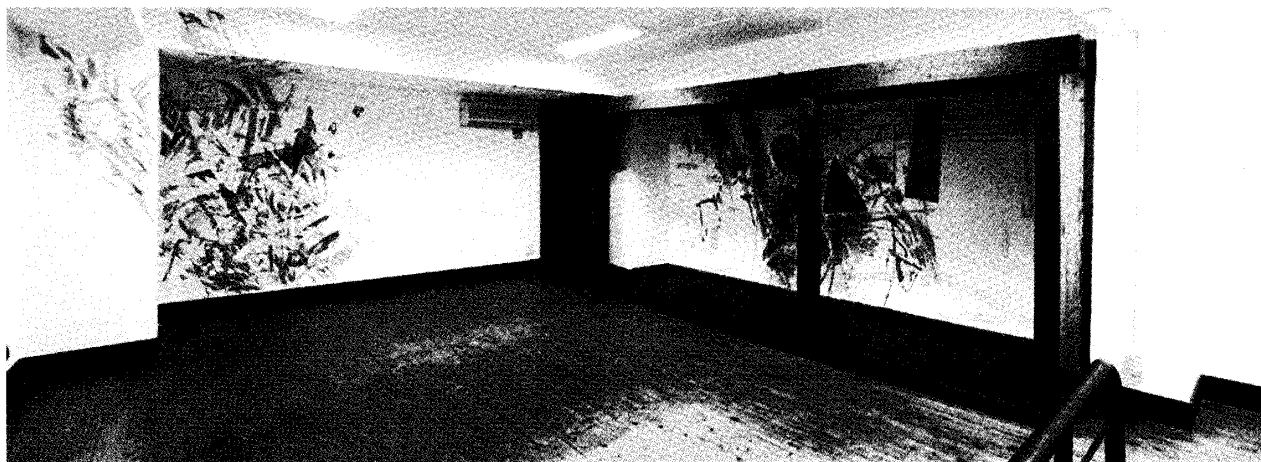
あれば、修正や消去も考慮しなければならないだろう。一日だけの一般公開^④に際して、記者の質問の中でいみじくも思い付いたことであるが、もし、この絵に子ども達が落書きする欲求を持ってくれたとしたら、それはこの絵の働きかけが成功した証であろう。そのことによって子どもの落書き（絵）とのコラボレーションが実現するなら、そこからまたわくわくするような新たな制作がスタートするはずである。

- (1) 武田五一（1872～1938）東京大学卒
京都大学建築学科設立、大阪城天守閣復元工事 京都市役所 島津製作所（現河原町別館）旧毎日新聞京都支社屋 等設計 国会議事堂（帝国議会議事堂）建設にあたって技術指導などを手掛ける。
- (2) 心の相談室 旧伊谷邸 1930年建設
設計者 武田五一
建築当時は京都のフランス料理店社長井谷氏の私邸として建てられたもの。一般的には俳優中村錦之助が住んだことで知られている。いくつかの転売を経て2000年、京都女子大学臨床心理カウンセリング施設として改修、転用。建て坪282.87m²居住空間二階建て106.50m²、倉庫（蔵）1階29.15m²、2階29.15m²、庭園（写真1）
- (3) 制作；「壁画とインテリアのコラボレーションの試み」arflex ART SPOT SERIES 1990-1 黒田克正・arflex Japan 1990年6月4日～23日
六本木ショップ arflex（東京）
高さ2.25m×総壁面10mのスペースに鉛筆・墨・パステル・アクリル絵具によるドローイングを6日間に渡って公開制作。その後インテリアと絵画作品と共に展示。
- (4) 公開：この作品は日時限定で一般に公開された。
公開日2003年11月19日（金）13時～16時
報道：（京都新聞）11月12日朝刊

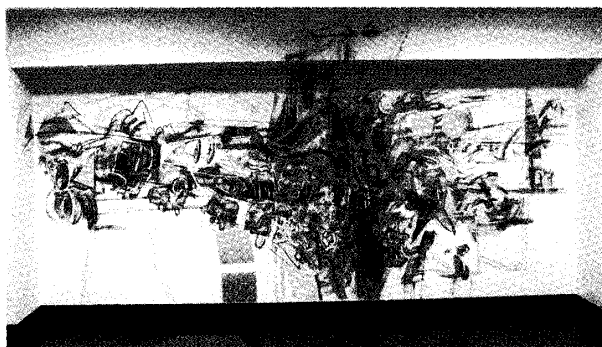
完成写真



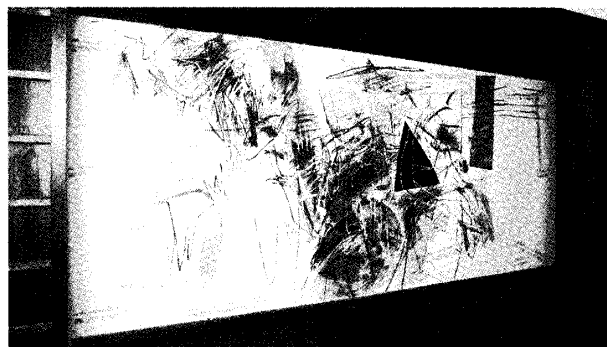
(写真1) 1階 正面(右) 232×500(cm) 左 235×305(cm)



(写真2) 2階 正面(右) 183×484(cm) 左 255×395(cm)



(写真3) 1階 正面



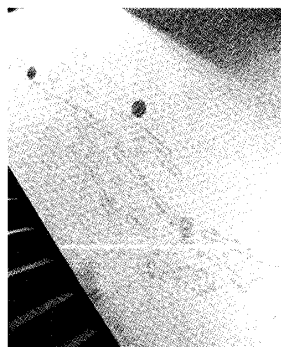
(写真4) 2階 正面



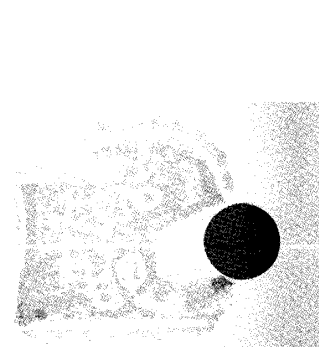
(写真5) 階段上
200×72(cm)



(写真6) 2階コーナー
200×72(cm)



(写真7) 階段横壁



(写真8) 階段上